

# 日本語学習支援ネットワーク会議 2014 in 青森

## 報告書



日時 2014年11月1日(日)  
場所 青森中央学院大学7号館713講義室

主催 青森中央学院大学国際交流センター  
協力 岩手大学国際教育センター  
助成 青森学術文化振興財団

## はじめに

外国人の散住地域であるという特徴を共有する東北地方において継続的に開催されてきた日本語学習支援ネットワーク会議が2014年度、初めて青森県で開催されました。日本語を学ぶ人への支援者にとり、同様の活動を行う他者の存在は刺激や支え、地域を超えた仲間やアドバイザーともなり、個々の支援者のモチベーションの向上や、支援グループの活動の充実にもつながるでしょう。建学以来、地域と密着し、教養・文化向上のための地域貢献を行ってきた青森中央学院大学が主催校となり、こうしたネットワークに加わる機会を持てたことは大変嬉しいことです。

今回、基調講演では、弘前大学人文学部の佐藤和之先生に「やさしい日本語」についてお話しいただきました。近年、多文化共生が叫ばれ、地域の外国人は同じコミュニティーを形成する住民であるという意識は高まってきていますが、東日本大震災を経験した現在、災害が起きれば外国人も日本人同様、被災の状況に置かれるのだと再認識することが大切です。講演では、地域における「やさしい日本語」での情報伝達の重要性、特に災害下でのその役割、そして、キーパーソンとして「やさしい日本語」を使用できる日本語支援者の役割について学びました。

パネルディスカッションでは、外国人を受け入れるグリーン・ツーリズムを取り上げました。グリーン・ツーリズムは観光客誘致、異文化交流・理解、日本語学習など様々な面に作用します。また、外国人、受け入れ農家、送り出しコーディネーター、語学サポーターなど複数の立場の人が存在します。このパネルでは、政策（青森県庁）、プログラム運営（青森中央学院大学）、外国人とのコミュニケーション（受け入れ農家）、グリーン・ツーリズムへの期待（在住外国人）について4者に聞き、青森県のグリーン・ツーリズムを概観します。そして、これら異なる立場の間で日本語支援をどのように組み合わせていけばよいかを考えました。

今回の会議では、2つの分科会を設定しました。1つは、このネットワーク会議が例年取り上げてきた外国につながる子どもの支援についてです。青森では、2013年2月に青森県国際交流協会の「多文化共生アドバイザー派遣事業」の一環で「外国につながる子どもの学習支援に関する研修会」が行われ、子どもの学習支援の重要性が確認されました。それと同時に、NPO法人「みちのく国際日本語教育センター」が活動中の八戸市以外での支援体制作りとそのための実態調査の必要性も明らかになりましたが、学校現場を管轄する県や市の教育委員会から協力を得ながら進めることの難しさもわかりました。今回、子どもの分科会に青森県教育庁から報告者を招き情報を得られたことは、県内の外国につながる子どもの支援のための基礎資料を得る上で、大きな一歩となることでしょう。

もう1つの分科会は、青森県内の日本語支援グループの取り組みの紹介です。青森県内では、拠点地間の遠さや支援対象・内容の違いなどから、従来、県下のグループの連携はあまり見られませんでした。今回、困難点とその克服方法を共有することで、互いの活動の参考にすることができるのではないかと考え、青森・弘前・八戸からの4グループにお話を聞きました。また、「実態がわからない」と言われていた青森県のグループが、それ

それぞれ様々な活動をしていることを報告することで、他県の支援グループとの新たなつながりができることも期待しました。

今回の会議開催にあたり、青森学術文化振興財団からいただいた助成金により、資金面をほぼ賄うことができました。また、多くの方々のご協力をいただいたことに深く感謝しております。岩手大学教育推進機構の松岡洋子先生には、最初から最後まで総合的にアドバイスをいただき、開催までに何をどうするか教えていただきました。岩手大学国際交流センターにもご協力いただきました。弘前大学人文学部の佐藤和之先生には、他県へのご出張前の時間を本会議の基調講演に割いていただきました。弘前大学国際教育センターの鹿嶋彰先生には、パネルディスカッションの骨格を形作っていただきました。本学国際交流センターの佐藤香織先生には、人手がない中、大きな力となっていただきました。その他、本学非常勤講師の奥苗美先生はじめ本学国際交流センターのスタッフの皆さんなど、多くの方に無事会議が終了するまでお手伝いいただきました。当日の登壇者の方々、報告者の方々にも心よりお礼を申し上げます。

次回 2015 年度は福島での開催となります。このネットワークの輪が確かにつながっていることを福島で確認できるでしょう。

なお、この報告書は青森中央学院大学の田中真寿美が編集・作成いたしました。ご意見、ご批判などをいただければ幸いです。

2015 年 3 月

田中真寿美

〒030-0132 青森市横内神田 12 青森中央学院大学経営法学部

masumi-tanaka@aomoricgu.ac.jp

TEL 017 - 728 - 0131 FAX 017 - 738 - 8333

## 目次

はじめに	1
プログラム	5
基調講演「外国人散住地域での言語権の保証と『やさしい日本語』」	
1・17、10・23、3・11ー外国人住民は災害下でどう情報を得ていたか」内容梗概	6
弘前大学人文学部教授 佐藤和之氏	
パネルディスカッション「グリーン・ツーリズムを通して見た外国人支援の形」資料	
「グリーン・ツーリズムの取組状況について」	7
青森県農林水産部構造政策課主幹 福士孝一氏	
「青森中央学院大学とグリーン・ツーリズム」	12
青森中央学院大学国際交流課課長 三浦浩氏	
「これまでの海外からの受け入れについて」	15
アジアからの観光客誘致推進協議会会長 田中久子氏	
分科会Ⅰ「外国につながる子どもの学習支援」資料	17
分科会Ⅰ報告	18
岩手大学 松岡洋子氏	
「青森県内の日本語指導が必要な児童生徒の現状と課題」	19
青森県教育庁 近藤鉄也氏	
「外国語を母語とする児童・生徒への日本語教育支援事業 八戸での事業化までの流れ と実践報告」	22
みちのく国際日本語教育センター 明日山幸子氏	
「ふくしま外国の子どもサポートセンター事例報告」	26
福島県国際交流協会 日下部喜美子氏	
「山形市の教育支援の取り組み 外国につながる子どもを地域全体で支えるために」	29
山形大学 内海由美子氏	
「熊本市の取組について」	32
熊本県立大学 馬場良二氏	
「『特別の教育課程』による日本語指導について」	36
帝京大学 土屋千尋氏	
分科会Ⅱ「青森県の日本語学習支援グループの取り組み - 困難点とその克服、これから - 」資料	
分科会Ⅱ報告	40
青森中央学院大学 田中真寿美	
青森日本語クラブ	41
弘前日本語クラブ	42
中川佳子氏	

日本語学習支援「青い森」 .....	44
	金子徳子氏
みちのく国際日本語教育センター .....	48
	馬場亜紀子氏
(資料参加) 国際文化交流クラブ .....	49
アンケート結果 .....	53
チラシ等資料 .....	57

# 日本語学習支援ネットワーク会議 2014 in 青森

日時 2014年11月1日(土)

場所 青森中央学院大学7号館1階 713講義室

主催 青森中央学院大学国際交流センター

協力 岩手大学国際教育センター

10:20 開会のごあいさつ 学校法人青森田中学園学園長 久保 薫

10:30-11:30 基調講演「外国人散住地域での言語権の保障と『やさしい日本語』  
1.17、10.23、3.11-外国人住民は災害下でどう情報を得ていたか」  
弘前大学人文学部教授 佐藤 和之氏

11:30-12:30 昼食休憩 \*1階カフェテリアを休憩場所として使っていただけます

12:30-14:00 パネルディスカッション「グリーン・ツーリズムを通して見た外国人支援の形」  
青森県農林水産部構造政策課主幹 福士 孝一氏  
青森中央学院大学国際交流課課長 三浦 浩氏  
アジアからの観光客誘致推進協議会会長 田中 久子氏  
国際文化交流クラブ副会長 太田 ミハイ氏  
司会 弘前大学国際教育センター准教授 鹿嶋 彰氏

14:10-16:10 分科会

## 分科会Ⅰ【713】「外国につながる子どもの学習支援」

1. 青森県内の日本語指導が必要な児童生徒の現状と課題 (青森県教育庁 近藤 鉄也氏)
2. 各地からの実践報告
  - ①八戸 (みちのく国際日本語教育センター 明日山 幸子氏)
  - ②福島 (福島県国際交流協会 日下部 喜美子氏)
  - ③山形 (山形大学 内海 由美子氏)
  - ④熊本 (熊本県立大学 馬場 良二氏)
3. 「特別の教育課程」による日本語指導について (帝京大学 土屋 千尋氏)
4. 意見交換 [進行 岩手大学 松岡 洋子氏]

\* この分科会は日本学術振興会科学研究補助金 (基盤研究(B)23320109「外国人散在地域の子どもへの教育における保護者・学校・支援者の連携・協働モデルの構築」)の助成を受けて行われています。

## 分科会Ⅱ【712】「青森県の日本語学習支援グループの取り組み-困難点とその克服、これから-」

青森日本語クラブ (蝦名 修治氏) 弘前日本語クラブ (中川 佳子氏)  
日本語学習支援「青い森」(金子 徳子氏) みちのく国際日本語教育センター (馬場 亜紀子氏)  
[進行 青森中央学院大学 田中 真寿美]

16:15-16:25 分科会報告・閉会【713】 [進行 青森中央学院大学 田中 真寿美]

基調講演「外国人散住地域での言語権の保証と『やさしい日本語』  
1・17、10・23、3・11ー外国人住民は災害下でどう情報を得ていたか」

弘前大学人文学部教授 佐藤 和之氏

内容梗概

神戸市は外国人居住者の多い都市ですが、1995年の阪神淡路大震災（以下阪神大震災）では、災害下での外国人対応の遅れや外国語での情報の少なさが大きな社会問題となりました。その後2004年の新潟県中越地震（以下中越地震）や2011年の東日本大震災を経験することで、阪神大震災からの学びを活かした外国人への支援活動が大きく発達しました。避難情報や支援情報はそれまでに比べ、さまざまなことばを話す外国人にも伝わるようになりましたから、阪神大震災のときの課題はしだいに改善されていっていると思います。

なかでも東日本大震災での多文化共生マネージャー全国協議会の「災害時多言語支援センター」（以下タブマネ支援）や仙台市国際交流協会の「仙台市災害多言語支援センター」（以下仙台市支援）の迅速な設置と支援対応は象徴的です。タブマネ支援は10の言語で、また仙台市支援は4言語での情報伝達をしていて、その10言語の一つ、4言語の一つが「やさしい日本語」でした。日本語とは別に用意された言語ですので、この意味で「やさしい日本語」は、外国人が理解しやすい外国語の一つとしての役割を担ったこととなります。

きょうは、これまでの20年で日本が経験した大規模地震から学んだ重要な3つの課題を情報や表現に限定して話します。そしてそれらを解決する「やさしい日本語」の効果とその信頼性について概略します。